

川崎ジュニア文化大賞

認め合える街・かわさきへ

小杉小学校 6年生 田口 竜雅

僕は、川崎の良い所はさまざまな文化や異なるものを受け入れて、一緒に成長しようとしている人がたくさんいるところだと思う。

僕の両親は、どちらも川崎出身ではない。二年生の時に自分の住んでいる街について勉強する機会があったから、どうして川崎に住むことにしたのか聞いてみたら、「住みやすかったからかな。よその地域から来た人もいっぱいいるし。昔からいるお店の人とかも優しかったから。」と言った。

その年の夏休みにフィジーという太平洋の島に行った。そこでは日本にはない食べ物や文化がたくさんあった。毎日が新しいことだらけでとても楽しかった。例えば初めて教会に行き、賛美歌を歌ったり、伝統的な儀式でカバという植物の根から取った苦い汁を飲んだりした。最初はわからないことも多くて緊張していたが、段々慣れてきて、最終的には現地で友達ができ、その頃には外国の文化にとっても興味を持っていた。今までは日本の中ばかりに目を向けてきた自分であったが、不思議なくらいに外国にひかれていた。次の年の夏休みもまた海外で勉強しよう決めて、どこに行こうか考えていた頃、僕にとって最悪の事態が起きた。

新型コロナウイルスが発生したのだ。そのせいで外出を控えることになった。国と国との行き来もできなくなってしまったので夏休みに海外へ行く計画は崩れてしまった。それどころかマスクが義務化され、学校に行くこともできなくなった。友達にも会えず、毎日がとても退屈だった。

しかし、そのおかげで良いこともあった。それは、川崎区にあるダンススクールに通ったことだ。そのスクールでは、ダンスを教えるだけでなく、子ども食堂やベトナム留学生が働くための支援を行っていた。学校が休校になってしまって、一人で家にいなければいけない子どもたちを受け入れて、学童として毎日教室をあけてくれた。

そこには、外国のルーツを持つ子どもたちがたくさん来ていた。毎日一緒に過ごすうちに僕は、ダンスや歌のほかにも大切なことを学んだ。それは、生まれた場所や文化の違いに関係なく協力し合えば、思ってもみなかった新しいものができるということだ。

一緒に舞台を作っているうちに理解が深まり、相手の文化の面白さや、自分の文化との共通点を見つけた。例えばベトナムの武術ボビナムなどだ。ボビナムは日本と言う空手のようなもので、空手をやったことのある僕にとって、とても楽しかった。「キジムナーの伝説」という沖縄の妖怪と友達になるミュージカルを作った。日本のアニメの曲に振り付けをして、クラブチッタという大きな劇場で踊った。文化交流でカルッツやアジアンフェスタなどにも出た。

舞台に出ると、川崎に住んでいる外国の人たちが、自分のパフォーマンスを見て、拍手をしてくれた。その人達の国の楽器演奏なども聞くことができ、海外旅行に行っているような最高の時間だった。特にアジアンフェスタではさまざまな国の食べ物やパフォーマンスが街中にあふれていて、楽しかった。たくさんの踊りを見て、食べ物を食べ、みんなが笑っている。文化が混ざり合うことはこんなに素晴らしいのかと感動してしまった。

だから同じ場所でヘイトスピーチを見た時はとても悲しかった。川崎は外から来た人を笑顔で受け入れる場所であってほしい。こんな差別を無くしていきたいと思った。どうすればいいのかは、まだわからないが自分自身も差別をしないように努力し続けたい。他の文化の人がたくさんいて、みんなが一緒に何かを作って、楽しそうに喋っている。そんな川崎の未来を実現していきたい。